
私、村長だけど家にとんでもない事になった

黒潮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私、村長だけど家がとんでもない事になった

【Nコード】

N9674Y

【作者名】

黒潮

【あらすじ】

魔物の王の出現を予測した国家による『勇者計画』。

ある村の村長はその計画に『ある意味』巻き込まれるのであった。

村長宅、刺さる（前書き）

初投稿です。

長文の練習のため書いてみましたが正直きつい。

村長宅、刺さる

私がこの家に暮らしてどれほどの年月が経っただろうか。

この場所に生まれ物心付いた時にはまだこの家は無く村と言うほどの大きさも無い小さな集落だった。

長く続いた戦争も終わりに近づき領主の館がこの近くに出来た事と案外水の利が良い事も手伝って徐々に人も増えていき、その内に村として形になると父は元々従者か何かをしていたらしく読み書き計算が出来それなりの体力があったのも手伝い自然に村長として扱われていった。

魔物の類が出ないと言えば嘘になるし危険が無いわけではなかったがそれなりに楽しい少年時代だったと思う。

来客の増えた我が家は村役場としても使えるように大きく立て替えられ小さな村にしてはそれなりのものだと思う出来になったと感じた。

私は父の後を継ぎこの村の村長にそれから数十年。

その間に恋をして愛を告げ共に誓い結婚をして息子が生まれその息子もそろそろ一人前の顔つきになるかどうかと言った所だ。

まあ私からしてみればまだまだだが。

辛い事も楽しい事も困難も幸福もあつた思い出深い我が村の我が家を見てしみじみといういろいろあつたなと感慨深くなる。

だからこそ。

だからこそ何だが。

どうしてこうなった。

我が家に剣が刺さっている。

最近活発化している魔物による被害を調査した結果、魔素の集中化による魔物の王とも呼べるモノの出現予測。

それに対応するための国家を挙げての『勇者計画』。

いくつかのタイプの戦力を作り上げそれを機軸に更なる技術を開発すると言う国中の魔道士及び研究者を挙げての一大事業。

その内の一つ『剣の勇者計画』。

各種魔道具だけに留まらず地脈その他まで利用し高性能な剣を作り上げると言う計画だ。

調査の結果、剣の出現場所に我が村が選ばれそして『勇者の剣』が我が家に刺さった。

そこまではいい。

確かに剣が刺さるのはなんだかなあとは思うが国の一大事であるし村民にも係わる事だ。

無視できるものではないし、それに対抗する手段が此処から生まれるのならそれは誇り高い事でもあるだろう。

だから問題はそこじゃない。

でかいだろこれ。

我が家もそれなりの大きさのはずだ。

宿屋など無いこの村ではある種の宿泊施設もかねるためそれなりの大きさに造つてある。

屋根裏の少し狭い部分も含めれば三階建てだ。

だが刺さっている剣の大きさはどうだ。

高さだけでもその倍は確実にあるだろう。

えーと剣だよなこれ。

こつ、手に持つて敵を叩ききる奴だよな。

両手剣とかそういう問題じゃないよねこの大きさは。

あれ？これもしかして失敗したのかな？

失敗だよなこの大きさじゃ振れないものね、まあお気を落とさ「お
お！成功だ！」成功なのかよ！

いやいや成功つておかしいだろ剣だよ剣。

『剣の勇者計画』で『勇者の剣』だよなこれ。

でかいの？勇者？もうこれ剣というかちよつとした壁だよこれ。
たぶん家の中部屋数増えたみたいなきんじになつてよ。
むしろこれを柱にして家が建つよ。

「おお…これは凄いい…」

村人の誰かから感嘆の声が漏れる。

うん凄いいと思うよー、これだけでかいものねー。

だけどねー村のみんなも気づいて欲しいなー。

成功の一言に湧き上がるのもいいけどさー。

おいちゃん正直びつくらこいてる状態だよ。

だつてこつ長年住んできた我が家にだね、剣のオブジェが刺さつて
るんだよ。

パツとみ家の方が後から出来たみたいになつてるんだよこれ。

もう村長の家じゃなくて剣っぱいなにかにくつついた家だよなこれ。
どうすんの抜けないよねこれ。

「では村長。後日これを抜く勇者を連れてくる。それまで不便だと思
うがこれも国のため耐えてくれ。」

抜けるんですね。

そしてでかいんですね勇者。

うわーでかいのかー勇者。

つか相手魔物だよな？魔物の王様のなそんな感じの奴だよな。

魔物って確か大きくて牛より2周り程度だよな。

何？魔物の王様だとでかいの？それとも数？たくさんくるの？王様なのにな。

どうすんだよこれ。

抜いた後直すの大変だぞこれ。

正直修理費でこの後とんでもない事になるんじゃないか。

え？補修に掛かるお金は出していただけ？

助かります本気で助かります。

まあ家を直す機会が出来たと思っただけであきらめるか。

では皆さん広場の方にささやかですが成功のお祝いとして酒席を用意してあります。

流石にこうなるとは予想してませんでした。

酒席も終え『勇者計画』の皆様も帰路につき片付けも終わると剣？の刺さった我が家を見上げてみる。

それにしても魔物の王か。

確かに馬鹿げているがこれだけの物を用意しなければならない事態とは一体どういった事なのだろう。

この村には愛着がある。

愛する家族がいて愛すべき村人がある。

困難もあったがそれなりに平和でもあった。

一抹の不安を覚えるが私に出来る事は少ないだろう。

一村長としての責務を果たすのみだ。

ふむ、今回の書類を片付けて今日は休むとするか。

…あ、書齋が半分になってる。

村長宅、パツクリ（前書き）

なかなかはどうしたものやら

村長宅、パツクリ

あれから幾日か過ぎ少々変わってしまった間取りに難儀しながらもとうとう『勇者』迎える日がやってきた。

大丈夫だろうか？そもそもこれだけ巨大な剣を抜けるとも思わないが抜けたとしてそれを抜ける勇者とはどれほど巨大なのだろうか。ある程度は国が補填してくれるとはいえやはり村に少なくない損害がでる可能性を考えると憂鬱にもなるだろう。

「村長、『勇者計画剣の勇者担当』クランクⅡバルブ様到着しました」

国の兵士が伝えにきてくれた。

ああそうかそのもの勇者！って訳じゃないものなあ、計画の担当って形になるのか。

とそこで勇者担当の名前に思い当たる。クランクⅡバルブと言えばこの辺りの領主の息子の名前ではなかったか？

確か魔法、剣術の才に長け若き逸材との噂もある人物だ。

しからばどうやってあの剣を抜くのだろう。流石にクランク様があそこまででかい身なりをしていないはずだ。

それだっただらすぐにでもそんな噂話の一つ二つでてくるだろう。

しばらくするとすらりとした鎧に身を包んだ爽やかな青年が歩いてきた。

「ああ村長、剣が刺さった事についてはすまないな。私が今回の担当のクランクだ。」

「いえ、国家の大事なれば些細な事ゆえ。しかしあの剣を抜くお方がバルブ家の跡取りであるクランク様とは知りませんでした。」

「計画が国家主体だからな。領の方とはまた係わり方が違うのだよ。」

「さようで、してどのようにしてあの剣を抜けますかな？ 私など最初あの剣のような巨大な勇者様が現れるのかと思っておりました」笑ってみせるが割りとは本気で思ってたのだ。

「それについてだが魔法で大きさを変えるつもりだ。余波が来ると危険なので少し下がっていてくれ」

了解すると見物人達は指定された位置まで下がる。

なるほどクランク様の魔法であの剣のサイズを圧縮するのか。

あれほどの大きさの魔法の産物を人が振るう大きさに圧縮するとなればどれほどのものになるだろう。

まさに『剣の勇者』であり『勇者の剣』であるわけだな。

胸中に会った一抹の不安は拭われ回りの見物人と同じようにいかなうな剣に仕上がるのか期待する。

クランク様がなにやら呪文を唱えると剣がそれに呼応しクランク様も光りだす。

光が収まり眩んだ目が慣れると『勇者の剣』が引き抜かれるのを見てその場にいる人間の息を飲む音が聞こえる。

我が家に倍する大剣は今まさに引き抜かれた。

でかくなったクランク様によって。

あー、そっちなー。大きさが変わるのそっちなんだー。

そうだよーその可能性もあったはずだよー。

けど頭の中で排除してたんだろうなー。だって被害がでかそうじゃないん。

事実我が家パツクリいってるよね。ほぼ両断だよーねあれ。

きりそこなったパンみたいになってるし。ギリ真っ二つじゃない程度だよねあれ。
首の皮一枚って感じだなー。

直るのかな私の家？

村長宅、キャノン（前書き）

三話目にしてやっと村長の名前が。

村長宅、キャノン

巨人となったクランク様はさておきこの村における勇者計画も無事に終わり我が家も修理する事となる。

村の大工であるナットも腕の振るい概があるなと意気揚々だ。そしてあくる日。

「なあナット。いくつか聞きたい事がある。」

「なんだ」

「あれはなんだ。」

「大砲だ。」

「それはわかる、わかりたくはないが。その大砲がなんで家についてるんだよ！

注文は家の修理だろうが！要塞の建設を注文した覚えは無いぞ！つかまたでかいなあい！

家って言うより大砲の隙間に住んでるみたくなってるじゃねーか！」

修理されたはずの我が家には何故か巨大な大砲が『組み込まれていた。

屋根に乗っかっているとかそういったレベルじゃない。

二階辺りから壁を突き出して砲身があり馬で運ぶようなものとは雲泥の違いを見せるでかさだ。

大砲としてみればそれなりに素晴らしい出来だろう。

家であった部分との違和感もさほど湧かずナット自身の腕のよさが見て取れる。

此処まで上手く作れる人間はそうはいないだろう。

だがこれは家だ。

軍事基地でもなければ大砲置き場でもない。

人間が生活する家だ。

こいつは昔からそういうところがあった。

手先は器用だし気もいい奴だ。

だが何がしか余計な一手を加えたがる。

ちよっとした彫刻を扉の端に施したりするのはまだマシだ。

それ自体はなかなか評判も良かったりするが、ひどい時は玄関に木彫りの胸像を置いたりする。

いつの間に作ったか誰もわからないほど仕事が早くまた出来も良かったりするのだがその木彫りは

特に有名でもない隣人だったりするのだ。しかも生き写しかのように似ているから気味が悪い。

流石に気味が悪すぎて撤去されていたが。

「んああ、で家についてる魔道砲の事なんだが」

「アレ魔道砲だったんか」

「まあアレだけでかいとな」

魔道砲。普通の大砲と違って魔法の力をどうたらこうたらするらしい。

詳しい事はわからんが。

「その辺りの事はわからんがその魔道砲がどうした？」

「ああ超長距離間射程多目的魔道砲、名づけて『アルベルト砲』だが」

「人の名前を大砲につけるな」

アルベルト。私の名前である。

「いいと思うんだがな。まあそのアルベルト砲だが『勇者計画』の

副産物なんだわ」

「あ？どういう事だ？」

「剣が刺さった時の事おぼえてるだろ？」

「忘れようが無いな」

「で『勇者の剣』を具現化するときには地脈やらなんやらまで使ったのも覚えてるか？」

その時刺さった部分に力が集中しやすくなるって予測があったわけさ。で事実あったと。

それをそのままってのももったいないってんで何がしかの装置を開発、組み立てたと。

もちろん資材は向こう持ち。払われる予算は純粋にこちらの取り分って訳さ。」

なるほど事が事だけに打てる手は打っておくってワケか。

「なるほどな。とりあえず家に大砲が付いてるわけはわかった。がしかし一言くれてもいいのにな。」

嫁さんになんていわれることやら。」

「その件なんだが」

「どうした」

「余った資材とサービスで水周りもろもろ新しくしたら機嫌がよかつたぜ。」

あともろもろ伝えてくれって言われてたの今思い出した。」

「なるほど原因はおまえかこのやろう。」

村長宅、回転す（前書き）

今回も探り探りです。

村長宅、回転す

『勇者計画』の担当方が我が村を訪れる。
最近はもうなれたものだ。

「ではアルベルト砲の試射の説明ですが」

「すいませんいみがわかりません」

「新型魔道砲ですからね。いざと言う時動かないと困りますので」

「打つのは確定なんですね。そしてその伝言はナット辺りに申し付けたんですね。」

「すいませんがこれからは私のほうへ直接お願いできないでしょうか。
あの男だとほぼこちらに情報が届かないもので」

アルベルト砲で決定なのか。

それはさておき。

テストのため空中に魔法で作られた標的が浮かび威力最小限での試射のための準備とデータ取りの為、各員慌しく動く。

短くは無いだろう人生を過ごした我が家幼き日の思い出と共に射角を取り台座ごと回りだす。

意味がわからない。

地面に固定されているはずの土台が回りだすのも意味がわからないが
そこまでするなら新しく立て替えたほうが良かったのではないかと思っ
思う。

「…発射準備。発射準備完了。発射5秒前、4、3、2、1、ぱっ
ちやー！」

担当者が噛むも我が家から突き出た大砲は特有の轟音ではなく
まるで金属で出来た獣が地の底から這い出るかのような唸りをあげ
て光りだし
いい歳こいたオッサンがぱっちゃ！とか言っちゃったのを気にしな
いかのごとく
目標に向かって一条の線を描きそれを貫き担当のオッサンが噛んだ。
私と同年代辺りであれば辛かろう。

「思った以上の威力だが」

「…しかしこの挙動は」

「…だとするとどこかに見落としが」

等となにやら専門的な話が聞こえる。

雰囲気を観察するに予想以上の高威力となにやら不可解な現象が起き
たようだ。

ふむ、とするならば我が家は別の場所に新しく立て直したほうがい
いのではないか。

副産物とはいへ流石に国の一大計画の成果だ。

機密云々もそうだが一村長の家として使い続けるのも不味かろう。

思い出の詰まった我が家故名残惜しいのもあるがいたし方あるまい。
新築に際して何がしか補助が出ると嬉しいのだが。

その事を先ほど噛んでいた担当の方に話すとその必要は無くむしろ
住み続けた方がよいとの事。

何を言い出すんだこのオッサンは、さっき噛んでたくせに威風堂々
と。

ぱっちゃ！とか言っていたオッサン曰く魔道砲の作り出す力場と
元々長くそこにすんでいた私との間になにやら魔法的な繋がりが出
来ている可能性があるらしい。

生活の拠点を変えない限りは問題なさそうだがそうでない場合最悪

爆ぜる可能性ありとの事。

何が爆ぜると言うのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9674y/>

私、村長だけど家がとんでもない事になった

2011年11月30日21時54分発行